

素 顔 拝 見



医歯学総合病院・講師
(歯科総合診療部)

石 崎 裕 子

こんにちは。平成20年6月より講師となりました石崎です。これまで歯科総合診療部の助教、その前はう蝕学分野（旧第1保存学教室）におりましたので、おなじみの顔ということになるのでしょうか。

私は新潟県高田市（現在の上越市）の生まれで、皆さん想像されるとおり雪深いところで育ちました。子供のころの密かな遊びは2階の下屋根から積もった雪に向かって飛び降りること（絶対にやってはいけないと大人から怒られます!）、大きなツララでチャンバラ遊びをするなど、男まさりでした。最近では温暖化の影響なのかあまり積もらないようですが、私が高校生のときは3年続きの豪雪で、最深積雪量が3メートルを越え、通学時に電線をまたぐという経験をしました。雪国の冬は日常生活や子供の遊びに危険が隣り合わせで、危機回避能力の一端が養われ、今も役立っているのではと勝手な想像をしております。

さて、歯学部入学と同時に新潟市に移り、現在に至るまで、留学した1年を除けば新潟県から離れて生活したことがありません。生粋の新潟県人といえると思います。大学に残った経歴は他の人とちょっと異なると思いますので、これから述べたいと思います。歯学部を卒業後、本学歯科の研修医となり第1保存学教室に残りました。2年間の研修修了後、研究生になりましたが、大学にいるよりも外勤に出ていることが多く、出張やアルバイトに奔走していました。その頃は仕事、生計、また精神的に最もつらい時期でした。この経験が現在の土台となっていると思います。研究生とし

て2年目を終えようとしている頃、佐渡の町立歯科診療所の常勤歯科医として赴任しました。任期は当初6ヶ月の予定でしたが、結局1年6ヶ月を診療所長として過ごすことになりました。本土より10年先をゆく超高齢化の地域であったこと、近隣にバックアップを依頼できる救急病院がなかったこと、過去に無歯科医地域であり欠損補綴が多かったこと、優秀な歯科技工士がスタッフにいたこと等、いろいろな面で勉強する機会に恵まれました。1年を超える任期であったことも、患者様のその後をみる事ができ、自身の評価・フィードバックになったと思います。さて、大学に医員としてもどってきて1年後に助手になり、臨床実習のライターとして6年生を指導するようになりました。助手になって2年経たないうちに当時のボスである岩久教授より「君、卒後何年目だい？」という問いかけから始まって、歯科臨床研修のための歯科総合診療部の創設に伴い移動となり、平成12年より歯科総合診療部の専任となりました。その後、学位の取得、UCSFへの留学を経験し、現在は卒後歯科臨床研修の指導、診療室のリスクマネージャーとして奮闘しています。研究は保存修復の分野で臨床研究やコンポジットレジン関連の基礎研究をしています。とくに天然歯の咬耗・磨耗について、長期にわたる息の長い研究をコツコツとしています。

ここまで仕事の話ばかりでしたが、趣味について1つ。大学学生時代は休止しておりましたが、子供のころに始め、大学卒業からもずっと続けている趣味があります。書道（かな書道）です。小さいもの（半紙）も書いていますが、大きいもの（半切、聯落サイズ）も書いています。毎月の締め切り提出と年1回の展覧会の出品、昇段試験に明け暮れておりますが、今年からまた新たな挑戦として大きな展覧会への出品を検討中です。もし作品がお目にかかることがあれば幸いです。先生が田上町におりますので、月2回程通って、帰り

に温泉に入ってくるのが現在の楽しみです。

派手なことではできませんが、継続は力なり、をモットーにコツコツと地道に取り組むことが特徴の人間と思っています。まだまだ至らないことは多いですが、これからも皆様どうぞよろしく願いいたします。

✧

心が疲れたら田舎へ行こう！

歯科麻酔科診療室

田 中 裕

歯学部ニュースは平成12年に「新任助手紹介」以来の登場となります。今回「素顔拝見」という原稿依頼を頂き、何を書けば良いものかと悩みましたが、私を御存じない方は多いと思いますので、まずは自己紹介させていただきます。私は地形や県民性から「日本のドイツ」と言われているらしい(?)長野県の、その中ほど、上田市の出身です。気がつけばもう20年以上も新潟市民として居座り続け、現在歯科侵襲管理学分野で仕事させて頂いておりますが、長野県人は愛県心が強いことに加え、「頭が固い」、「閉鎖的」、でも「話が長い(語りたがる)」、そして「信濃の国が歌える！」という、ちょっと他の県とは違う独特の特徴があるのだそうで、私もその県民性は未だに体に染みついているなあ〜と実感することしばしばです。そんな故郷も今は他の市町村の例にもれず人口減少・少子高齢化が進んでおり、私の同級生世代が今必死に町おこしを頑張っているということを風の便りで聞きました。そこで今回は素顔拝見とはかなりかけ離れてしまっていますが、折角頂いた機会をお借りして、町おこしのお手伝い(宣伝)がてら、故郷をちょっと思い出してみたいと思います。

私の故郷、上田市は周囲を360度山に囲まれた盆地であります。ちょうど長野市、松本市、そして軽井沢を結んだ三角の真ん中に位置しております。山中の盆地ですので、私の実家は標高約500mのところであり、新潟でいえば弥彦山の中腹に住んでいるような環境です。夏は涼しく、冬は死ぬほど寒い、でも風雨は非常に少なく傘は殆ど必要



としなからってして住みやすい気候です。さてこの上田市の名産といえますとリンゴ、そば、くるみ、野沢菜、おやき、などがあり、特に「そば」は全国区的にもかなり有名で美味しい蕎麦屋さんが数多くあります。しかし私の御用達は実はおそばでなく、JR上田駅からちょっと路地に入った「中村屋」という店の「うどん」です。これは馬肉を使ったうどんなんですけれどこれが絶品で、上田市民御用達の隠れた名店で、この店のうどんを食べるために私は実家に帰省するといっても過言ではありません。さらに裏名産というものも実は存在しておりまして、「蜂の子」「ざざ虫」「イナゴの佃煮」という海無し県ならではの蛋白源3大珍味があります。もう二度と食べたいとは思わない珍味ではありますが、なんと今ではお土産として売っているそうです。一方、観光地としては、大学ラグビー合宿のメッカである菅平高原、美ヶ原高原(美術館)、信州の鎌倉といわれるほど数多くのお寺や神社に囲まれた別所温泉がありますが、特に「南向観音」の別名をもつ国宝善光寺とは対の存在である北向観音は有名です。さらに、戦国時代のドラマでは必ずチョイ役ででも出てくる真田昌幸・幸村、この上田城を作った真田家の屋敷跡地というのが、私の母校上田高校です。今も高校の周りにはお堀が残っておりまして、観光名所となっております。そんな城跡・お寺・神社といった古い建物、そして高原や山ばかりの田舎町が上田市の特徴ですが、実はこの田舎さ加減が今では映画やビデオクリップの撮影場所として有名になっているそうで、最近では「私は貝になり

たい]、「博士の愛した公式」など数多くの映画や、ミュージシャンのビデオクリップに上田が撮影場所として使われているのだそうです（詳細は「信州上田フィルムコレクション」<http://www.ueda-cb.gr.jp/fc/>）。また先日公開となったアニメ映画「サマーウォーズ」の舞台が上田市なのだそうで、この映画のキャッチコピーが、まさに『夏休みには田舎に行こう！』なんだそうです。私は今でこそこの田舎の風景に癒されたくて帰省するのですが、子供の頃はその良さが分からず、それ以上に海への憧れが強くありました。ですから子供の頃から千曲川で遊びながらいつかは海の近くに住んでみたいという希望を叶えるため、いつしか千曲川を下り、信濃川と名を変えて海へと続くこの川つながりの新潟市へとたどり着き、現在まで居座ってしまいました。今は海のある新潟が大好きですが、でも疲れたり落ち込んでしまった時には「この信濃川の水は、実家へとつながっているんだよな～」と信濃川を眺めながら故郷を思い出して癒され、それを励みに日々仕事にいそしんでおります。

是非皆さんも心が疲れてしまった時には、新潟と川でつながっている田舎町、私の故郷上田市にも足を運んで頂き、田舎の醍醐味を満喫され癒されてみてはいかがでしょうか？ 映画やビデオに出てくる古い街並みや自然に囲まれると、ちょっとタイムスリップしたような、映画のエキストラになったような、そんな気分になって、すこしだけ気持ちが楽になるかもしれませんよ。

✧



医歯学総合病院
(口腔外科・歯科病理検査室)

丸 山 智

平成21年2月1日より医歯学総合病院の講師として歯科病理検査室での診断業務を担当させていただいております。本学卒業29期生です。平成17年5月1日より口腔病理学分野の助手として勤務

させていただき、その際歯学部ニュース（平成17年度第2号）の素顔拝見のコーナーで、生い立ちから病理学を専攻するに至ったいきさつを書かせて頂きました。以前にも少し書かせていただきましたが、口腔病理学は口腔顎顔面領域に生じる病気を解析することを目的とした病理学の専門分野で、我が国では基礎系に属しており、教育は一般病理学および口腔病理学という基礎系分野を担当しています。一方日常の臨床業務としては、口腔顎顔面領域に生じる病気の病理細胞・組織診断（確定診断）を担当し、臨床系分野同様に、歯科臨床において適切な診断・治療をおこなうために直接関わる重要な貢献をおこなっております。現にこういった観点からか、欧米では口腔病理学は臨床歯科の一分野として位置づけられています。しかし日本では残念ながら上記のとおり基礎系に属しており、代わりに本学では、口腔病理学分野の臨床業務をおこなう拠点として、私の勤務する歯科病理検査室が医歯学総合病院内に開設されています。そこで今回は私が勤務している病理検査室のこれまでのあゆみと今後の展望について私なりに書かせていただこうと思います。

歯科病理検査室の歴史を振り返ってみますと、平成5年6月14日に当時の歯学部附属病院に病理検査室が開設されたのが始まりです。開設されるまでは、口腔病理学講座の研究室内で標本作製から診断までをおこなっていたようですが、当時の病院長ならび関係の先生方のご配慮、そして朔教授をはじめとした口腔病理学分野のスタッフの努力のおかげで、臨床業務を附属院内でおこなえるようになったとのことで、そのときの病理関係者の感激は大変おおきなものであったと聞いております。開設後も包埋作業等の自動化や診断システムの構築等をすすめ、さらに近年では自動免疫染色装置の導入などに取り組み、日々診断業務をおこなうために快適かつ効率のよい作業環境の整備をおこなってきました。また教育的側面では、歯学部5・6年生の臨床実習の中に生検・病理検査実習を取り入れて、臨床場面で病理検査を利用できる歯科医師の育成をおこなってきました。そしてこのたび私が歯科病理検査室に配属になったのと時を同じくして、病院機能評価の観点および

病院診断業務は病院スペース内でおこなう方が望ましいとのご配慮から、この5月より歯科病理検査室内に診断室として診断をおこなうスペースを確保していただき、長年の課題のひとつでありました病理診断業務を学部研究室から病院の中の診断室でおこなうという本来のかたちに移行しつつ、診断室の整備をすすめております。

また、2008年4月より病理診断科が標榜科となり、セカンドオピニオンといった社会的ニーズが高まっています。その一方で、歯科医療における病理検査現状に目を向けてみますと、病理検査依頼がほぼ口腔外科領域に限られており、歯科全体では歯科医師のなかで病理検査に関する認知度は未だ低く、歯科臨床において病理検査が広く行われていないという状況があります。今後は、病理検査の精度向上はこれまでどおりわれわれの使命と考え、日常の研鑽をおこたらないことはもちろんですが、これらの現状を受け止め、歯科医療の向上につながるように変えていくかを大きな課題と考えており、その中心的存在としての役割を歯科病理検査室が果たせるように、微力ながら努力していきたいとおもいます。どうぞよろしくおねがいいたします。

✧

噛み合わせ診療科・助教

昆 はるか

こんにちは。義歯入れ歯診療室所属の昆と申します。大学院を卒業後、分野に在籍せず、勤務医を経験した後、平成18年からまだ大学に戻ってきました。しばらく大学を離れていたせいで、研修医の先生から「先生はどこの大学の出身ですか?」と聞かれたこともあります。大学に残っている同期生の名前を挙げると「そんなに学年が離れているのね」という顔をされ、私も年をとったなあと感慨深いです。考えて見ますと学部を卒業してもう10年が経ち、卒後に描いていた10年後のビジョンとかけ離れた現実に努力不足を感じる今日この頃です。

さて、最近学生さんの話を聞いていると、卒後どうするか悩んでいるのだなあと感じます。そん

な話を聞くと、なんだか自分が学生の頃を思い出してとても新鮮な気分です。私は飲み込みが遅いところがあり、学部卒業後いきなり大学の外に勤めるのに不安があったことや、ちょっぴり研究に憧れて? いたため大学院に行こうと早い時期から決めていました。大学院4年間は必ずしも結果がでることばかりでなく、苦しむことも多かったのですが、幸い良い先輩達にも恵まれて最終的には大学院進学は私の人生のなかで通るべき道であったかなと納得できるようになりました。今は卒後研修が必須なので、選択肢が少ないですが、大学に残るにせよ、研修を終えて学外に出るにせよ、望んでいると思わぬすばらしい師と会うこともあります。私自身は大学院時代には、教授をはじめいろいろな先生から学ぶ機会を得ることができたのは幸運だったと思いますし、さらには学外に勤務することで、専門の違う、他大学出身の院長の診療を身近に見ることで、新潟大学にいたら知ることのなかった世界を垣間見ることができたかなとも思っています。

話しは変わりますが、ここで私の大学院時代の思い出について触れたいと思います。その当時、先輩達が結成した? 有酸素運動部なるものがあり、「大学院4年間にマラソン大会に出場し、合計100km走ろう!」という目標がかかげられ、私はひそかに燃えていました(残念ながら、新潟マラソン10km部門で3回、浦佐の山岳マラソン「歩こうの部 20km」2回で合計70kmしか走れず、目標に達することができませんでした)。先輩方は新潟マラソンの20kmやフルマラソンに出場したりしていましたが、なかなか20kmを走るというのは容易なことではありません。そこで私がたまたま見つけたのが、浦佐の山岳マラソン「歩こうの部20km」だったので。走るではないけれど、まあ山の中を20km散歩するのは楽しいだろうし、豚汁とおにぎり券がついているのが嬉しく、参加前はピクニック気分でのんびり構えていました。しかしスタート地点には、いかにも鍛えています! という人々が! 少々恐れをなしながらも、スタートすると、「歩こう」のゼッケンをつけた年配の方が、スタートとともに走り出したではありませんか! 平地を走るのでも十分苦しいのに、浦佐の山岳マ

ラソン「歩こうの部」は、スタートからしばらく坂道にも関わらず、皆さん走っていくのです。アップダウンがある上に9月の残暑も加わって、かなり苦しいのですが、私より明らかに年配の人にしゃきしゃき追い抜かれると、やめられなくなる気分で、なんとか2回とも完歩（完走？）しました。2回目に参加した際には、両親がゴールで待っていてくれてとても嬉しかった思い出があります。いまやマラソンのマの字もない生活ですが、昨年から教授の野村先生が新潟マラソンに参加しているのを聞き、来年こそは10kmから挑戦したいと考えているところです（100kmにはまだ30km足りないで……）。

＊



助教
（組織再建口腔外科学分野）

小島 拓

こんにちは。組織再建口腔外科分野の小島です。歯学部ニュースでは今まで、「大学院入学にあたって」、「大学院修了にあたって」を書かせていただきましたが、今度は「素顔拝見」を書くことになってしまいました。もう書く内容が無いような気もするのですが、前回の続きということで大学院修了後のことを中心に書きたいと思います。

平成15年に本学を卒業し、大学院生として組織再建口腔外科学分野に入局、平成19年3月に大学院を修了しました。その後、4月には医局の関連病院である鶴岡市立荘内病院歯科口腔外科に1年間長期出張に行かせていただきました。大学院卒業後で臨床経験も技術も未熟な自分を、医長の先生は大変厳しく指導してくださいました。長期出張に行ったばかりの頃は自分の診療に自信がなかったこともあり、診断・治療方針などをすぐに先生に聞いてばかりいて、「すぐに人に聞くな。まずは自分で考える。」と厳しい言葉をいただきました。それまでの自分には、「上の先生がいるから大丈夫」といった甘さがあったと思います。

その後は、なんとか自分自身で解決できるように努力を重ねました。経験が浅い分、知識だけでも、口腔外科に関する文献をたくさん読んだり、医長の先生の診療を見学して技術を学んだり、できる限りのことをしました。もちろんそれでもわからないことには、自分なりの考えを持った上で相談するようにしました。「まず自分で考えてみる」という姿勢は、今の自分にとってとても大きな財産になっていると思います。思い返すと、このように自分で解決策等を考えるのは、実は大学院の時に一番学んだことのように思います。思うような研究結果がでなかったとき、何故うまくいかないのか、何がいけないのか、どうしたらいいのかと頭を悩ませ、他の人の研究を見学させてもらったり、論文を読んだりとなんとか解決策を見つけようとしたものでした。臨床も研究も取り組む姿勢は一緒だと思いました。おかげでたくさんの臨床経験を積むことができ、外来小手術はもちろん、手術室での執刀も数多く経験させていただきました。総合病院での勤務だったこともあり医科の先生方とお話する機会にも恵まれ、全身疾患のある患者様への対応や、医科の先生方がどのような考えで治療を行なっているかなど直接お話を聞くことができ、大変勉強になりました。

そして、一年間の長期出張を終えた後は大学に戻り、現在に至ります。日々の診療の中で、以前には気付かなかった反省点に山ほど行き当たる毎日です。これは一度大学を離れ、再び大学に戻るといことで、自分を見つめ直すことができたおかげだと思います。その意味でとても有意義な経験でした。大学には齊藤先生を始め尊敬できる先生方が多数おられます。そのような先生方の診療を身近で見られること、また、一緒に診療ができることは本当に恵まれていると思います。こんな私ですが、外来では教授係を担当させていただいております。日々多くのことを勉強することができ、本当に感謝しています。しかし、自分の段取りの悪さから外来を走り回ることが多く、齊藤先生をはじめ、患者様、周囲の方々に迷惑をかけ、大変申し訳なく思っております。齊藤先生から「緊急時以外は走らない！」と注意されたとき、思わず「教授係はいつも緊急です！」と訳のわからな

い言い訳をして苦笑いをされたこともありました。まだまだ余裕の無い私ですが、少しずつでも成長していけたらと思っております。

最後になりましたが、帰りが遅くなることが多い旦那を許して（許してない？）支えてくれる妻と、家に帰ると玄関先まで「パパー、お帰り！」と迎えに来てくれる息子（おかげで夜更かしの癖

をつけてしまいました…）には、いつも元気をもらい感謝しています。休日ができれば家族でドライブ、小旅行に出かけるのが今の一番の楽しみです。

周囲の方々への感謝の気持ちを忘れずに今後も頑張っていこうと思います。どうぞ宜しくお願いします。